

「乳飲み子」を「見る目」

—ハンス・ヨナスの責任倫理学における認識論について—

戸谷 洋志

はじめに

放射性廃棄物が自然環境に対して安全なレベルに達するまでに、最低でも 10 万年がかかるといわれている。それが正しければ、現在の世代が作り出した放射性廃棄物によって、数万年後の人類に危害が及ぶという事態が現実的に想定されうることになる。ここには世代間のコンフリクトがある。ただし、未来の世代が危機に陥るとき、現在の世代は既に存在しない。そうである以上、現在の世代と未来の世代の関係は対称的ではない。

科学技術による影響が広範な空間的・時間的地平を持つことによって、人類全体の存続を義務付ける新たな倫理学が要請される。その倫理学は、このように当事者同士が非対称的な関係にあることを前提にしなければならない。この前提が、世代間倫理の固有の性格を特色づけ、同時に理論の形成を困難にする。現在世代は未来世代を一方向的に傷つけることができる。現在世代は未来世代と討議をすることはできないし、出会うこともできない。そうであるにも関わらず、地上における人類の存続に対する責任を基礎付けるには、どのような説明が可能とされるべきなのだろうか。ハンス・ヨナスの主著『責任という原理』*Das Prinzip Verantwortung*(1979)は、この問いに回答を与えようとする書物である。

ヨナスの回答は簡潔である。確かにこの問題を伝統的な倫理学の枠組みによって解決することは難しい。しかし、非対称性を前提とする倫理のあり方を、人類は既に一つ知っている。それは「乳飲み子(Säugling)」に対する責任である。「乳飲み子」と、それを世話する者とは、非対称的な関係にあるにも関わらず、そこでは道徳的な責任が実現している。それなら、人類に対する現在世代の責任を基礎付ける際にも、「乳飲み子」に対する責任を原型として参照すれば良い。

先行研究において、ヨナスのこのアイデアは責任倫理学の思想の核心として取り上げられる¹。そう理解される理由は容易に想像できる。「乳飲み子」という原型は、分かり易過ぎるのだ。言うまでもなく、その分かり易さこそヨナスが「乳飲み子」を原型として選択した主たる狙いなのである。しかし、分かり易いということは、同時に分かりに難しいということの証左でもある。その極度の簡潔明快さのために、「乳飲み子」の原型に対する構造的な解釈は行われないままになっている。これに対して、『責任という原理』にお

¹ 加藤はヨナスの思想に対して「乳飲み子の倫理」というキャッチフレーズを与え(cf, 加藤: 1998., p.158.)、ヨナス自身がそうした表現を採っているのではないにも関わらず、清水もこれを継承している(清水: 2012)。日本国外の研究では「乳飲み子」よりも、同義語として用いられる「子供(Kind)」が術語として用いられる傾向にある。討議倫理の立場に属するK-O・アーペルは、ヨナスの責任倫理学をポスト慣習的な道徳の基礎付けの試みの先例として評価しつつも、「子供」への責任を原型とする発想に対して批判を加えている(cf, Apel: 1988., SS.196-197.)。アーペルと同じく討議倫理の立場に属しながらヨナスを研究するD・ベラーもまた、ヨナスの「子供」概念を批判し(Böhler: 2004)、V・ヘスレはこれに対して肯定的な評価を与えている(Hösle: 1997)。ベラーとヘスレの解釈については本発表の第二章で言及する。

ける「乳飲み子」の原型の機能を精確に捉えることが、本発表の目的である。具体的には、本発表は「乳飲み子」に関する議論を単なる直感主義的基礎付けとしてのみ捉える解釈を批判し、その認識論的機能を明らかにする。この解釈を提示することで、本発表はヨナスの責任倫理学の構造的な理解を一層明晰なものにすることを目指す²。

第一章 『責任という原理』における「乳飲み子」の概念

第一節 あらゆる責任の原型としての「乳飲み子」への責任

科学技術を規制し、地上における人類の存続を基礎付ける新しい倫理学は、当事者間の非対称性を前提にしなければならない。それは、言い換えるなら、討議や契約による基礎付けを放棄しなければならない、ということの意味している。従ってこの倫理学は、人類の存続それ自体に当為を帰属させるという形では、実現されない。

ただちに次のような批判が浮上するだろう。存在に当為を帰属させるという試みは単なる形而上学であり、不可能である、というものだ。しかしこの批判はヨナスには通用しない。ヨナスに拠れば、「存在から当為は導出できない」³という近代の「ドグマ」⁴は、存在一般を没価値的な「単なる剥き出しの「ある」」⁵として捉える存在解釈に基づいている。しかし、この存在解釈がそれ自体で正しいという根拠は何もない。存在と当為の分離を主張する者は、「こうした存在についての考え方を仮定することによって、すでに一定の形而上学を反映していることになる」⁶。従って、形而上学であることを理由にヨナスを批判する者は、その批判によって自らも形而上学を前提していることを暴露され、自己矛盾に陥る。

もちろん、そうした反駁が可能であることが、ヨナスの形而上学の妥当性の根拠にはなるわけではない。ヨナスは次のように指摘している。

(カントに拠れば)あらゆる神の存在証明(Gottesbeweis)は存在論的論法に還元され、あるいはそれに依拠して示される。それと同様に、あらゆる道徳的規則の妥当性証明は、結局、存在論的な当為についての獲得され得る実証(erlangbar Ausweis)に還元される。この実証の可能性が神の存在証明より以上のものではないのだとしたら、まさに今日の場合のように、倫理学の理論は困難な状態にあるだろう。⁷

存在を当為へ帰属させるという倫理学の妥当性は、そうした当為が事実として存在することを、「証明」(Beweis)を超えて「実証」(Ausweis)することによって根拠付けられなければならない。ただ存在するという事実だけで、周囲に対して道徳的配慮を促すような存在者を示すことで、責任倫理学は「実証」されなければならない。その際、ヨナスによって提示される「存在的な模範」⁸が、「乳飲み子」である。

² ヨナスの著作については原則として邦訳を参照したが、必要に応じて訳し直した箇所もある。

³ Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979).S.92.

⁴ ibid., S.92.

⁵ ibid., S.235.

⁶ ibid., S.92.

⁷ ibid., S.234.

⁸ ibid., S.235.

ヨナスに拠れば、「乳飲み子」は「時代を超えたあらゆる責任の原型」⁹である。生まれたばかりの子供は、自分で生存する能力を持たないために、他者から保護されることを必要とする。そのようにして、「赤ん坊の単なる呼吸は、世話をせよという一つの当為を、反論の余地なく周囲へ向ける」¹⁰。呼吸する「乳飲み子」を目の前にした者は、法に縛られるわけでもなく、あるいは制裁によって強制されるわけでもなく、その「乳飲み子」を世話しなければならないという義務を自覚する。世話する者は、自分の責任について、「乳飲み子」を「見れば分かる」¹¹のである。ただし、この義務は「乳飲み子」との契約や討議に基づくわけではない。何故なら、「乳飲み子にはまだ頼みごとをする能力がない」¹²からだ。従って、この義務は非対称的な関係を前提にしているのであり、だからこそ反論の余地がないのである¹³。

第二節 「乳飲み子」によって表現される責任の構造

以上のような「乳飲み子」への責任という原型は、非対称性を前提とする責任一般の構造を明らかにさせるための、拡大鏡として機能している。

「乳飲み子」は自分で生きていくことができず、他者に保護されなければ死んでしまう。「始まりつつある生命にのみ特有な、自らの存在の所有と非所有との独特な関係」¹⁴のうちに、「乳飲み子」は置かれている。こうした生存に対する能力の欠如、無力さは、「乳飲み子」の偶然的な性格ではなく、むしろ必然的な性格である。「産まれた子それ自身の根本的な不十分さによって、産んだ者がその子の無への転落を防御し、その子のさらなる成長を待つことは、いわばあらかじめ存在論的に見越されたことである」¹⁵。そうした「乳飲み子」の無力さに対して、それも今誰かが助けなければ簡単に死んでしまうような無力さに対して、周囲の者は責任を自覚するのである。

ここには、責任の対象になりうるものの条件が拡大的に示されている。「ひとが責任を持つことができるのは、移ろいゆくものに対して、死滅と崩壊の危機に瀕したものに対して、要するに滅亡してゆく儚きものに対してだけである」¹⁶。最初から傷つく余地のないもの、死ぬ可能性を持たないものに対して、保護をするという責任は生じない。その責任はあくまでも傷つきやすいものを対象としなければならない。「責任のありかとは、生成の海につかり、可死性に委ね渡され、消滅の脅威に震える存在である。乳飲み子はこ

⁹ *ibid.*, S.234.

¹⁰ *ibid.*, S.235.

¹¹ *ibid.*, S.236.

¹² *ibid.*, S.235.

¹³ ただし、反論の余地がない一方的な義務であるからといって、その義務が常に実現されるとは限らない。「私は「反論の余地なく」とは言うが「抵抗なく」とは言わない。なぜなら、どんな当為でもそうだが、この当為も、当然抵抗を受けうるからである」(Jonas: 1979., S.235.)。現実として、子供を遺棄する親は存在するし、多くの子供たちが餓死する地域も存在する。しかし、「要求それ自体に反論の余地がないことと、その直接的自明さは、これによって何ら変わりはない」(*ibid.*, S.235.)。また、この義務は肉親が自分の子供に対してのみ持ち得るような母性愛のようなものによって決定されるわけでもない。「自然が強力な本能と感情によってこの当為に助けを与えないのだとしても、それどころかたいていの場合のようにこの仕事を完全に引き受けることがないのだとしても、この当為はやはり機能するはずである」(*ibid.*, S.235.)。

¹⁴ *ibid.*, S.236.

¹⁵ *ibid.*, S.240.

¹⁶ *ibid.*, S.226.

のことを模範的に示している」¹⁷。換言すれば、傷つきやすいもの、死の危険にさらされているものは、その事実だけで既に責任の対象の条件を満たしている。「もともと責任の対象になれるのは、窮状にあり危険にさらされている生物だけである」¹⁸。従って、あらゆる生命が責任の対象となる。「乳飲み子」の無力さは、生命一般の必然的な傷つきやすさを拡大させてみせる原型として、理解されなければならない。

同時に「乳飲み子」という原型は、責任の対象がどのように認識されるか、という点に関しても示唆を与える。「子に対する責任が原型であるのは発生論的、類型論的な観点から見てだが、ある意味では「認識論的」な観点から見てもそうである」¹⁹。「乳飲み子」は、物体としては「分子の集合体」²⁰に過ぎない。「乳飲み子」をそうした単なる物体(「剥き出しの存在」)として捉える限り、「分子の存続の諸条件の一つ」としての「物理化学的な相互作用」²¹が発見されるだけであり、そこに当為を見て取ることはできない。しかし、そうした「数学的物理学者の分析的眼差しは、乳飲み子をまったく眼中に入れてはいない」²²。むしろ「乳飲み子」を「乳飲み子」として認識する²³には、「ことがらを全体として見る」²³が必要なのであり、「乳飲み子」から突きつけられる義務の呼び声を、自然科学的な「還元というフィルター」²⁴にかけずに把握しなければならないのである。

人類の存続に対する責任もまた、こうした原型の応用の一つとして解釈される。人類の存続は現在世代の科学技術の威力によって滅亡の危機にさらされており、その現実をありのままに直視するとき、現在世代は責任を自覚せざるを得ないのである。

第二章 「乳飲み子」の概念に対する批判と解釈

第一節 ヘスレによる「乳飲み子」への責任の解釈

「乳飲み子」への責任という原型は、以上のように、存在と当為が事実的に一致するということの「実証」として用いられている概念である。同時にこの原型は非対称的な責任一般の構造契機を拡大的に示す。V・ヘスレは、こうしたヨナスの思想に対して肯定的な評価を与えている。

ヘスレに拠れば、「乳飲み子」は「そのうちで存在と当為が一致する存在者の原型」である。「子供は存在するべきである。そして子供を助ける行為はこの存在を守ることと、保育することとに成功するべきである」²⁵。親が子供(「乳飲み子」)に対して抱く感情は、親の行為を道徳的な行為へと拘束する。こうした「ヨナスが無力な子供を根拠としているということは、度々にわたって哲学的に不適切なものとして非難されてきた」²⁶。それは、道徳の合理的な妥当性を親の感情によって証明しようとしているからである。「実際に、ヨナスが論証と感情を混同しているということは、認めざるを得ない」²⁷。しかしながら、感情によ

¹⁷ ibid., S.242.

¹⁸ ibid., S.185.

¹⁹ ibid., S.234.

²⁰ ibid., S.236.

²¹ ibid., S.236.

²² ibid., S.236.

²³ ibid., S.236.

²⁴ ibid., S.236.

²⁵ Höhle, Vittorio, "Ontologie und Ethik bei Hans Jonas", *Ethik für die Zukunft, Im Diskurs mit Hans Jonas*, Böhler, Dietrich(Hg), Verlag C.H.Beck, München, 1997., SS.105-125., S.115.

²⁶ ibid., S.122.

²⁷ ibid., S.122.

る説得が根拠を持つのは、その感情を共有しうる限りにおいてのみであって、それが規範の普遍的な拘束力を正当化することはできない。この点についてヨナスが被る批判を、ヘスレは認める。しかし、だからといって「乳飲み子」への責任という原型を全面的に退けることは、あまりにも非生産的である。「道徳的な感情は、具体的な道徳的生活に対するその極大の意義に関しては、疑いの余地のないものである（しかし倫理学の基礎づけに対してではない）」とヘスレは主張する。「自分の親を愛すべきか否かを迷う者には、証明が必要なのではなく、懲罰が必要である、というアリストテレスの注釈がある。それが例えば、泣き叫ぶ生まれたばかりの子供を助けようという直接の道徳的感情が欠落した人間による、怖ろしい出来事である、ということを読みれば、その注釈は一定の重要性を持つ」²⁸。自分の両親を敬愛することができない人間は、大人の役目を引き受けることができないという意味で、「乳飲み子」を世話することに無関心であるかも知れない。それこそ道徳的に最も恐怖すべき事態なのである。

ただしヘスレは、ヨナスが「乳飲み子」という原型によって責任倫理のうちに道徳的な感情の重要性を指摘した点は肯定的に評価しつつも、それを理論として満足に彫琢することはできなかったと指摘する。「たとえ、過剰なまでに主知主義的な時代の中で道徳的感情の不可欠性をあくまでも主張ということだが、ヨナスによる有意義な功績であるのだとしても、『責任という原理』においては道徳的感情について何らかの仕上げられた理論が要求されているのである」²⁹。

第二節 ベーラーによる「乳飲み子」への責任の解釈

ヘスレが「乳飲み子」の原型を肯定的に解釈するのに対して、極めて強い批判を加えるのが、討議倫理の立場に属する D・ベーラーである。その批判の要点は、ヘスレが与えた上述の留保と重なる。しかしながら、その強度はヘスレのそれの上を行く。

「乳飲み子」に対して責任を負う者は、自分の責任については「乳飲み子」を「見れば分かる」、とヨナスは主張する。この見解に対してベーラーは敏感に反応する。「あなたがそれに対して責任を負うところのもの、つまりあなたが関与している保護を必要とする生命、価値ある生命、有機的な生命に対して、「あなたは見れば分かる」。このことを、ヨナスは直感主義的に述べる」³⁰。確かに「乳飲み子」の世話をする者は、「乳飲み子」に対して直感的に責任を感じるだろう。「ヴィットリオ・ヘスレが「ハンス・ヨナスにおける存在論と倫理学」という犀利な研究の中で指摘しているように、ここでは存在と実為が実際に一致しているように見える」³¹。しかし、こうした直感主義的な論証では「義務、配慮、将来への備えに對するどのような妥当性の根拠をも」³²説明することはできない。

その根拠として、ベーラーはヨナスの責任倫理学が本来不可欠であるはずの審級の概念を閑却している点を指摘する。「ヨナスは、責任概念が対話的かつ相互的な意味の妥当性に基づき、他者の前で、あるいは審級の前で責任を取ることに基づいているのであり、その帰結として人は問いと非難に十分に応

²⁸ ibid, S.122.

²⁹ ibid., S.122.

³⁰ Böhler, Dietrich, “Ethik der Zukunfts- und Lebensverantwortung.”, *Orientierung und Verantwortung. Begegnungen und Auseinandersetzungen mit Hans Jonas.*, Böhler, Dietrich und Brune, Jens Peter (Hg.), Verlag Königshausen & Neumann GmbH, Würzburg, 2004, S.97-160., SS.154.

³¹ ibid., S.154.

³² ibid., S.154.

答することができるという事実を、閑却している」³³。責任という概念の構造には、責任を誰かに対して負うと同時に、誰かの前で負うという契機が含まれている。債務者は債権者に対して責任を負う。しかし同時に、その責任を法の前で、あるいは裁判官の前で負うのである。そうした意味での開かれた審級の前でこそ、責任は公正なものとして機能する。それに対して「乳飲み子」に対する両親の責任には、そうした審級が存在しない。この点を閑却しているという事実は、責任倫理学において「乳飲み子」概念が持つ原型としての地位を、決定的に疑わしくさせるものである。

以上のようなヘスレとベラーの解釈は、次の点で共通している。すなわち、「乳飲み子」への責任を、親が自分の子供に対して抱く感情としてのみ解釈しているということである。両者の解釈を、ここで直観主義的解釈と名づけることにする。直観主義的解釈に基づけば、「乳飲み子」への責任は、親によってはそれを感じない可能性が存在するために、論証として機能しない。しかしながら、この直観主義的解釈の妥当性は、決して自明のものではない。「乳飲み子」を「乳飲み子」として理解しながら、そこに責任を感じない可能性が、果たしてヨナスの存在論のうちにありうるか。この点を明らかにするために、本発表は「乳飲み子」の認識をめぐる議論をあらためて検討する。

第三章 責任倫理学における認識論

第一節 「乳飲み子」を「見る目」

「乳飲み子」が世話を要求するということは、「見れば分かる」。ただしそのためには、世話する者が、「乳飲み子」を「乳飲み子」として理解していなければならない。つまり、「乳飲み子」が傷つきやすく存在と非存在の狭間で揺れ動く存在であるということを、理解しなければならない。その意味で、世話する者は、死の危険に晒された「乳飲み子」と、死の可能性をはじめから持たない無生物とを識別する能力を有していなければならない。ヨナスはこの識別能力を「見る目(Sehvermögen)」と呼ぶ。「当然のことながら、もっとも明らかに目に見えるものも、それに対して目に見えるものが存在するような見る目を用いることをなお要求する。私たちがいう「見れば分かる」ということはこの見る目へ向けられているのである」³⁴。言葉を換えれば、「見る目」を持たない人間にとって、「乳飲み子」は「乳飲み子」としては存在しない。その人間の目に映るのは「分子の集合体」でしかない。ヨナスは、上の引用個所に次のような注を付している。「ここに潜む方法的な、および認識上の問題点については、私の以下の研究を参照せよ。『生命の哲学』第五章「神は数学者か？」」³⁵。

ヨナスの指示に従って『生命の哲学』*Organismus und Freiheit*(1973)に視線を向けると、そこではこの「見る目」がどのような構造を持つ認識方法であるかが考察されている。端的に表現すれば、それは現象学的方法である。同書では「乳飲み子」、あるいは「子供」という表現が術語として用いられることはないが、その代わりに主題となるのが生命である。「乳飲み子」は存在か非存在かに開かれた存在者一般の原型であった。そうである以上、それは生命の本質的な特徴を拡大させるイメージである。『生命の哲学』において論じられる現象学的方法は、人間が生命を生命として理解するということの可能性の条件は何な

³³ ibid., S.154.

³⁴ Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979), S.236.

³⁵ ibid., S.404.

のか、という問いへの探究に従事する。従って、ここで論じられる生命の認識方法は、「乳飲み子」を「看る目」の原理的な構造を論じるものとして理解されるべきである。

同書の第五章「神は数学者か？」という論文の要旨は次のようなものである。もし、万物を数学的に理解する神が存在するとして、その神は生命を認識することができるだろうか。それは、この世界を数学的に記述しようとするとき、生命を正しく記述することは可能であるか、という問いに等しい。ヨナスの回答は、はっきりと否である。確かに、生命が持つ肉体を数学的に記述することはできるだろう。しかし、生命は物質交代の働きによって絶え間なく自己を構成する肉体を摂取、排泄しているのであるから、肉体を数学的に捉えている限り、個性そのものを理解することはできない。生命は流動的な統一体であり、物理的な定点を持たないからだ。確かに、数学的な神は世界に存在する物質を余すところなく認識できるだろう。しかし、その神の目に映るのは死んだ物質が空間を飛び交う荒涼とした風景でしかない。世界を数学的に記述する限り、生命と非生命の区別が認識されることはないのである。

では、生命と非生命を区別しつつ、生命を生命として認識するための可能性の条件は何であるか。その条件は、認識者自身が生きていることである。視覚を持たない者には視覚の意味が理解できないように、生命を理解することができるのは生きている者だけである。「生命を観察する者は、生命によって準備を整えていなければならない」³⁶。「生命を観察する者」は、他者が生きているということを理解する際に、自分が有機体として持つ体験を他者に投影することで、他者が生命であるということを解釈するのである。ここで投影される体験とは、自らの生存を無条件の目的(あるいは善)としながら、絶え間なく死の可能性を克服しようとする実存的な体験に他ならない。ヨナスはこの手続きを「補間(Interpolation)」と呼ぶ。

「有機体への内的同一性を補間することはこうして可能なのであって、この補間によってのみ、物質交代の連続という形態上の(それ自体は意味を欠いた)事実が絶え間のない活動として把握され、継続されたあり方が自己継続として把握されるのである」³⁷。ここでは、「生命を観察する者」が、「自分自身が有機体であると気づいていること」³⁸は事実として前提されている。認識者自身が常に既に有機体として生きているという事実性に基づいて、生命の解釈は初めて可能になるのである³⁹。

第二節 「補間」としての「看る目」

再び、『責任という原理』に目を戻す。上述のような生命に対する認識の原理的な構造は、「乳飲み子」の原型においても反復されている。ヨナスは「乳飲み子」を指して次のように論じている。

³⁶ Jonas, Hans, *Organismus und Freiheit; Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1973., S.129.

³⁷ *ibid.*, S.138.

³⁸ *ibid.*, S. 142.

³⁹ J・P・ブルーネは、人間が人間以外の生物の内面性に接近するための認識方法として、補間を主題的に検討している。ある生物が、その周囲の環境から独立の存在者として認識されるためには、その生物になんらかの内外の境界があり、従って内面性が認められなければならないが、「こうした『内面』は、ヨナスに拠れば補間を通じて、自己経験によって接近可能な人間の内面を、動物へと類推するとき接近可能になるべきものである」(Brune: 2007., S.99.)

この存在は、私たちの一人一人の始まりであったのであり、そのときには私たちはその存在を知らなかった。しかし、もし私たちが見ることができ、知ることができるのなら、この存在はどんなときでも差し出される。⁴⁰

本発表はこの記述を決定的なものとして重要視する。ヨナスはここで、「乳飲み子」を「私たちの一人一人の始まり」と表現している。これは、「乳飲み子」を「乳飲み子」として解釈する「見る目」を持つための、可能性の条件を示唆している。上述の「補間」概念は、生命の認識の可能性の条件を、認識者自身が生命であることとして提示していた。それと全く同じ意味で、「乳飲み子」を「見る目」の持ち主は、その者自身がかつて「乳飲み子」であったのでなければならない。もちろん、それはいかにも当たり前の主張ではある。かつて「乳飲み子」ではなかった人間など存在しない。人間は、常に既に、「乳飲み子」であったという過去を生きている。それは、人間が飛び越すことのできない事実性であり、「われわれの時間的存在の存在論的な構造」⁴¹である。人は誰でも、昔は自分一人の力では生きていけなかったことを覚えている。死の危機に晒されたときに、求めもしていないのに他者が助けてくれたことを覚えている。そのようにして、「親による配慮という根源的な責任を、誰もがまず第一に自分自身で経験している」⁴²。大人になった人間は、そうした事実性の地平の内部から、「乳飲み子」を「乳飲み子」として理解するのである。

「乳飲み子」を「見る目」は、その意味で、かつて自分自身が「乳飲み子」であったという記憶の「補間」である。あるいは、「乳飲み子」が死の危険に晒された存在者の原型であるということを念頭に置けば、こう言い替えてもいい。人間はかつて自分自身が死の危険に晒される脆弱な存在であったことを覚えている。だからこそ、目の前に存在する死の危険に晒された存在者を、そうした者として理解するのである。——こう言い換えると、それが『生命の哲学』における説明と、ほぼ完全に重なることが分かる。

もちろん、「乳飲み子」への責任はあくまで原型であって、それがどの程度メタフォリカルなものであり、どの程度真に受けてよいものであるかは、留意しなければならない。しかし、発表者による以上の解釈は大胆に過ぎるものではないだろう。ヨナスに拠れば、「責任の対象は、滅びゆくものであり、滅びゆくからこそ責任の対象となる」⁴³のであるが、同時に「この対象と私との間には、ともに滅び行くものという共通点がある」⁴⁴。責任の主体である「私」と、責任の対象である他者は、ともに「滅び行く」という存在様態を持つ。それは、上述の解釈を踏まえれば、「私」が「滅び行く」のであるからこそ、他者が「滅び行く」ということを理解できるからである。もし「私」が「滅び行く」ものでなかったら、「私」には他者が「滅び行く」ということが理解できないだろう。数学者としての神が、生命を理解できないように。そして、この「滅び行く」という存在様態の原型が、「乳飲み子」として表現されているのである。

従って、「乳飲み子」を「乳飲み子」として理解しながら、「乳飲み子」への責任が生じない可能性は、ヨナスの存在論に即する限り存在しない。何故なら、生存を無条件の目的(善)とする存在様態こそが、生

⁴⁰ Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung; Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979), S.235.

⁴¹ *ibid.*, S.198.

⁴² *ibid.*, S.185.

⁴³ *ibid.*, S.166.

⁴⁴ *ibid.*, S.166.

命を非生命から区別する本質的な特徴であるからだ。同時に、そのように責任を負う可能性は、実際に「乳飲み子」を産んだ肉親だけに生じるのではなく、かつて「乳飲み子」であった全ての人間に開かれているのである。

結論

以上の検討から、本発表は次の三つの主張を結論として提示する。

第一に、「乳飲み子」への責任という原型に対する直観主義的解釈は、『責任の原理』に対する内在的な解釈としては妥当ではない。その責任は、肉親が自分の子供に対してのみ持ち得る感情ではない。また、当為を伴わない没価値的な生命の理解も不可能である。直感主義的解釈にあくまでも固執する者は、つまり没価値的な「乳飲み子」の理解の可能性を主張する者は、「乳飲み子」が一つの生命として自己の存続を無条件の善とするという事実を否認しなければならず、生命と非生命の存在論的な区別が不可能になるという事態を認めなければならない。結局のところその主張は、生命を非生命に還元する「死の存在論」⁴⁵に陥らざるを得ない。

第二に、『責任という原理』は『生命の哲学』と密接な連関を持っている。本発表はその連関をヨナスに即して明らかにした。『責任という原理』は、『生命の哲学』において形成された方法論、存在論を理論的な前提として、成立している。従って、ヨナスの哲学的生命論の精確な理解なしに、責任倫理学の内在的な解釈は不可能なのである⁴⁶。

第三に、本発表はヨナスの人間観の一端を明らかにした。人間は皆、かつて「乳飲み子」であった。その頃の「私」は、一人では生きていけなかったし、その上誰かに助けを請うこともできなかった。それなのに、他者が助けてくれたからこそ、「私」は今ここにいる。それは単なる綺麗事ではなく、人間の存在論的な構造なのである。人間は常に既に「乳飲み子」であった過去を生きているのであり、その限りで「乳飲み子」的なものである。この人間観は、自由に言語能力を操ることのできる「大人」として人間を捉える人間観と、鋭く対立する。こうした人間観の違いのうちに、たとえばヨナスと討議倫理との間の根本的な対立があるのかも知れないが、ここでは紙幅の制約からその問題には踏み込まない。ただし、少なくとも次のように主張することは許されるだろう。討議し、契約し、コミュニケーションする主体だけを人間として捉える人間観は、ごく控えめにいって狭窄である。そうした人間観への固執は、話す能力を持たない人々、あるいはコミュニケーションの機会をあらかじめ奪われている人々を、人間の枠組みから排除する。ヨナスの責任倫理学は、そうした他者に対して、責任を感じることの必要性を主張しているのである。

【引用文献】

Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung; Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979).

⁴⁵ Jonas, Hans, *Organismus und Freiheit; Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1973., S. 29.

⁴⁶ これに対してH・グロンケは、『生命の哲学』が採った現象学的方法の不適切さのために、ヨナスは哲学的生命論を断念せざるを得ず、責任倫理学へと主題を移していった、という見解を示している(cf, Gronke: 2007., S.286.)が、ここでは紙幅の制約から詳細な検討を避ける。

(ハンス・ヨナス, 加藤尚武監訳, 『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』, 東信堂, 2000年。)

—— *Organismus und Freiheit; Ansätze zu einer philosophischen Biologie*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1973.

(ハンス・ヨナス, 細見和之・吉本陵訳, 『生命の哲学—有機体と自由』, 法政大学出版局, 2008年。)

—— *The Phenomenon of Life. Toward a Philosophical Biology*, Northwestern University Press, New York, 2001(1966).

Apel, Karl-Otto, *Diskurs und Verantwortung: Das Problem des Übergangs zur postkonventionellen Moral*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1988.

Böhler, Dietrich, “Ethik der Zukunfts- und Lebensverantwortung.”, *Orientierung und Verantwortung. Begegnungen und Auseinandersetzungen mit Hans Jonas.*, Böhler, Dietrich und Brune, Jens Peter (Hg.), Verlag Königshausen & Neumann GmbH, Würzburg, 2004, SS.97-160.

—— “Hans Jonas —Denken zwischen Verstehen und Verantworten” , *Mensch-Gott-Welt. Philosophie des Lebens, Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Böhler, Dietrich / Gronke, Horst / Herrmann, Bernadette (Hg.), Rombach Verlag KG, Freiburg i.Br./Berlin/Wien, 2008, SS.145-170.

Brune, Jens Peter, “Können wir Leben verstehen?”, *Mensch-Gott-Welt. Philosophie des Lebens, Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Böhler, Dietrich / Gronke, Horst / Herrmann, Bernadette (Hg.), Rombach Verlag KG, Freiburg i.Br./Berlin/Wien, 2008, SS.89-111.

Hoesle, Vittorio, “Ontologie und Ethik bei Hans Jonas”, *Ethik für die Zukunft, Im Diskurs mit Hans Jonas*, Böhler, Dietrich(Hg.), München, 1997, SS.105-125.

—— *Eine kurze Geschichte der deutschen Philosophie*, Verlag C.H.Beck, München, 2013.

Gronke, Horst, “Phänomenologie und Ontologie – Wie philosophiert Hans Jonas? Ein Versuch”, *Mensch-Gott-Welt. Philosophie des Lebens, Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Böhler, Dietrich / Gronke, Horst / Herrmann, Bernadette (Hg.), Rombach Verlag KG, Freiburg i.Br./Berlin/Wien, 2008, SS. 269-326.

Müller, Wolfgang Erich, “Organismus und Verantwortung. Hans Jonas' Begründung der Ethik in der Philosophie des Lebens”, *Weiterwohnlichkeit der Welt. Zur Aktualität von Hans Jonas*, Christian Wiese und Eric Jacobson (Hg.), Philo Verlagsgesellschaft mbH, Berlin und Wien, 2003, SS.242-255.

尾形敬次, 「存在から当為へ ——ハンス・ヨナスの未来倫理」, 『哲学年報 (46)』, 北海道哲学会, 1999年, pp.1-13.

加藤尚武編, 『環境と倫理：自然と人間の共生を求めて』, 有斐閣アルマ, 1998年。

品川哲彦, 『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』, ナカニシヤ出版, 2007年。

清水俊, 「乳飲み子の倫理と未来世代への責任」, 『先端倫理研究』, 熊本大学, 2012年, pp.36-48。